

三月二三日(水)

昼過ぎには止みそうだった雨は結局、夕方まで降り続けている。雨脚は弱まっているが、両手をポケットに突っ込んで、傘を広げずに「濡れて参ろう」と歩く気にはならない。

アーケードのある商店街を通り、阪急の駅に直結しているソシオを抜け、改札の前までやってきた。間も無く、一八時。学生も社会人も、まだそれほど多くはない。

「新田さんは、直帰でしたっけ」

少し先を歩いていた浪川一輝くんが、券売機の前から戻ってきた。私の隣に立つ元娘婿、新田慎一郎くんは頷いた。

「武藤さんは、」

「私はちよつと寄り道して帰るよ。駅ナカでよかつたら、一輝くんもどうだ？」
お猪口を傾ける仕草を試みるものの、一輝くんはちよつぴり申し訳なきような表情を浮かべる。

「お気持ちありがとうございます、ちよつとだけ仕事が残ってます」

立ち話に花を咲かせていると、梅田行きの電車が入ってくるアナウンスが聞こえてきた。一輝くんは少々慌てて、「また今度、行きましょう」と言い残して改札内へ入って行った。ホームへのエスカレーターに乗るまで、何度かこちらを振り返って挨拶してくれる。その姿が見えなくなるまで、しつかり見送り、今度は慎一郎くんの方を見た。彼は微妙な緊張感を残したまま、私が次に何をやるか、気にしているようだ。

「直帰なら、君も同じ電車でよかつたんじゃないか？」

「その通りなんですけど、一服してから帰ろうかな、と」

一杯引っかけて、にはならないらしい。

「キミと行った喫茶店なら、もう無いぞ」

「そうらしいですね。この間、近くまで行ってビックリしました」

慎一郎くんは落ち着いた表情で、穏やかに言った。彼は親指を立てて、背後の喫茶店を指した。

「とりあえず、アソコにします？」

「ああ、いや、私は私で、適当に一杯引っかけてから帰るさ」

「そうですか……」

彼は一瞬腕を組むと、肘の辺りを指先で軽く叩いた。腕組みを解くと、「じゃあ、ここで失礼します」と軽く頭を下げた。慎一郎くんは「お気を付けて」と言い残り、改札の向かいにある喫茶店へ入って行った。

彼が改札の前を離れると、徐々に人の往来が激しくなってくる。後ろ髪を引かれる思いで後ろ姿を見送っていたが、早々に切り上げて駅の南側へ向かう。二階の突き当たりにある中華屋か、その手前辺りにある串揚げ、隣のニューミュンヘンにでも行けば、傘を気にすることなく飲んで帰れる。

改札を避けて奥へ進み、南側の改札前を通り抜け、市立ギャラリーの横を進む。水曜日だからか、一八時過ぎの駅ナカでも、人通りが若干少ない気がする。JRの方に向かっていけば、選択肢はもつと少なかっただろう。

洋菓子の焼ける甘い匂い、ラーメン屋のスープの匂いに、パスタ屋のニンニク臭。魚の匂いも心惹かれるが、「いちご大福」の文字も捨てがたい。一杯引っかけて帰るのを辞めて、和菓子のお土産を買って、まっすぐ帰ろうか。

桜餅と花見団子も旨そうだ。二つずつと手提げ袋を買い、小銭を一枚ずつ数えながら、志津香の表情を脳裏に思い描いた。

初出 令和三年四月二五日 Mediumにて公開